

## 日本微生物資源学会第19回大会報告

第19回大会大会長 鈴木健一郎

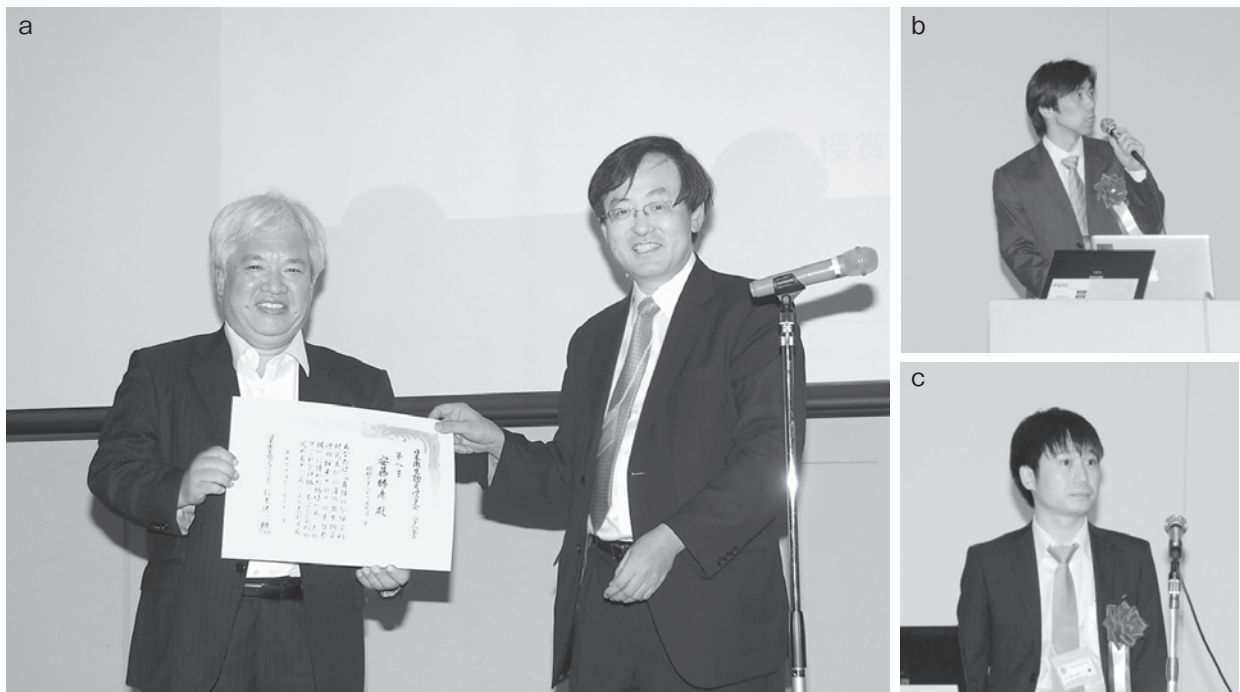
平成24年度の大会は、私が大会長を務めさせていただき、独立行政法人製品評価技術基盤機構バイオテクノロジーセンターがお世話させていただいた。木更津での大会は平成18年度の大会に次いで2回目となる。前は、NBRCにとって学会の大会のホストをするのは初めてで、木更津のかずさアークという特殊なロケーションで皆様にご不便をおかけしたかと思うが、今回はそれよりは慣れた運営ができたことと思う。天候にも恵まれ、会場隣接のかずさアカデミアパークホテルも利用できたことも幸いした。参加者の内訳は、正会員70名、名誉会員2名、機関会員5名、賛助会員4名、非会員10名、シンポジウム講師3名の94名であった。

大会は、原則例年と同じく、一般の口頭発表とポスター発表と、招待講演によるシンポジウムという構成で行ったが、一昨年まで大会前日に行っていた実務担当者会議を実務ワークショップとして大会の行事に組み込み、初日の最初に行った。そして、特別講演に代えて基調講演はシンポジウムとテーマを合わせたので、2日目最初をお願いすることになった。

一般講演は口頭発表9題、ポスター発表21題の合計30題で、微生物の分離、分類に関する発表を中心に、生理性状に関するものなど、微生物資源の保存と利用の基盤となる研究が発表された。ポスター発表のうち、10演題は、カルチャーコレクションの事業の実績あるいは活動に関するものであった。

実務担当者会議あらため実務ワークショップのテーマは、「ユーザー満足度向上のためのサービス」ということで、NBRC、JCM、MAFFから話題提供していただいた。いずれのコレクションもいずれも幅広いユーザーを対象としたコレクションであり、ユーザーとの接点は、コレクション側はユーザーのニーズ把握に有益であり、ユーザーは適切な微生物株の選定や使用に役に立っていることが分かった。

総会に引き続き、日本微生物資源学会賞の授賞式が行われた。学会賞にNITEバイオテクノロジーセンターの安藤勝彦氏が、奨励賞には理研バイオリソースセンターの飯野隆夫氏と株式会社県南衛生工業の矢部修平氏が受賞



a: 学会賞受賞の安藤勝彦氏 (左), b: 奨励賞受賞の飯野隆夫氏, c: 奨励賞受賞の矢部修平氏

された(写真)。安藤氏はライフワークの菌類の分離、分類を話題の軸に、大学での研究生活、企業でのコレクションの管理、生物多様性条約、特にそのアクセスと利益配分に対する取り組みなど多様な経験をもとに様々な視点から紹介し、トピックスを交えながらの話は聴衆を引きつけていた。奨励賞の 2 人は、ともに新奇微生物の取得を中心とした研究発表であったが、ともに得られた細菌は新綱の提案を含む高い新奇性を持つものであった。そしていずれも分離株のゲノム解析が行われ、今後有用な微生物資源として活躍することが期待されている。

一般講演を活性化するために賞を設けることが直前の理事会で提案され、今回の大会では「試行」という形で行われた。したがって発表者には事前にお知らせすることができなかった。選考委員による投票の結果、口頭発表を対象とした「ベストプレゼン賞」が東京大学の川船かおる氏をはじめとするグループに、ポスター発表のうち、研究成果の発表を対象とした「学術ポスター賞」には NITE の村松由貴氏らのグループに、保存機関の活動を発表を対象とした「機関ポスター賞」には早乙女梢氏をはじめとする鳥取大学のグループに授与された。来年度も実施されるかどうかは理事会で検討することとした。

シンポジウムは「標準微生物とカルチャーコレクション」というタイトルで、検査などに使用される微生物株の保存・提供と、その利用を話題に取り上げた。基調講演を東京農工大学の松岡英明教授の「微生物試験法の合理的バリデーションの鍵となる生菌標準物質」につづき、産総研の高津章子氏から「計測と標準物質—物理計測、化学分析、そして微生物計測へ—」、岐阜大学の江崎孝行教授から「MALDI-TOF-MAS を使った GTC 株の病原因子保有株の品質保証へ向けた取り組み」、(財)日本食品分析センターの馬場 浩氏から「菌株保存機関と試験室とのかわり」、NITE の中川恭好氏から「カルチャーコレクションにおける品質管理—NBRC 細菌株を例として—」と、4 人の講師から、それぞれ標準物質の考え方、開発の立場、コレクションのユーザーの立場、そしてコレクションにおける品質管理の視点からご講演いただいた。検定菌の提供は研究材料や分類学的基準株の提供と同等以上に重要なカルチャーコレクションの機能の一つであり、品質についてはむしろ一番高いレベルが求められているといっても過言ではないことが印象付けられた。

最後に、本大会のために千葉県木更津市まで足を運んでくださった参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、シンポジウムでご講演いただいた講師の先生方にも感謝申し上げます。次回大会は 2012 年 9 月につくば市に移転することになっている理研バイオリソースセンター微生物材料開発室の大熊盛也室長が大会長を務めてくださることになりました。そこで皆様と再会できることを楽しみにしております。

(独立行政法人製品評価技術基盤機構バイオテクノロジーセンター上席参事官)